

二〇一二年 度

青山学院中等部入学試験問題

国語

注意 ・指示があるまで開いてはいけません。

・答えは解答用紙に書きなさい。

・記号がついているものはすべて記号で書きいれなさい。

・句読点や「」も一字とします。

・試験中は横を向かないこと。早く終わっても周囲を見まわしたりしないこと。そのような場合には注意されることがあります。

□ 次の詩を読み、下の問いに答えなさい。(わかりやすい表記になおしたところがあります)

ペンキ屋

溝田清盛 (小学六年)

おとうさんはペンキ屋をしていなさる。

汽船のどうばらや

軍艦のマストや

グレンなどをぬりなさる。

教室のまどから

いま港の高いグレンをながめている。

あのグレンも、おとうさんによってぬられている。

あの上からおちたら、

おとうさんはこっぴどみじんになってしまう。

それを思うと胸がどきどきと鳴ってくる。

④だがそんなことは一生にない。

夏は暑いおてんとうに

ざらざらとてらされて

冬はかんかん鉄はこおって

手さきはくされるようになるとおっしゃる。

おとうさんは、どんなにひどい仕事をしてでも

子どもをしあげずにはおかんとおっしゃる。

⑤

おとうさんのすがたが、グレンのてっぺんで

あんなにちいさくサルのように見える。

おとうさん、しつかりおやりまつせ、

ぼくは ⑥

(滑川道夫『こどもの詩』牧書店)

【語注】マスト＝帆柱。

グレン＝船から重い荷物をあげて陸へおろしたり、反対に船に荷物を積んだりする起重機。クレーン。

(1) — ④「だがそんなことは一生にない」と作者が言い切るのは、何の表れですか。

ア (おとうさん) が事故にまきこまれやしないかという不安感
イ (おとうさん) に不幸が起こらないようにという強い願い
ウ (おとうさん) がもつ仕事に対する情熱へのあこがれ
エ (おとうさん) には事故をおこす余裕すらないという悲しさ

(2) ⑦ ⑧ はどれがあてはまりますか。

ア ああ、楽しそうだな。 イ ああ、うれしいな。
ウ ああ、ありがたいな。 エ ああ、元気があるな。

(3) この詩を説明した次の文章について、以下の問いに答えなさい。

今、作者の (おとうさん) は、港で高い起重機 (グレン) の上でペンキをぬり、作者はそれを胸をどきどきさせながら見つめている。教室のまどから見える (おとうさん) は、夏は ① まみれになって働き、冬は凍ってしまうくらいに冷たい ② にさらされ、年中危険と背中合わせになりながらひたすら働いている。
(おとうさん) がこうして仕事を続けられる理由は、家族の存在があるからであり、父のあたたかい気持ちによって作者は強く心を打たれ、その思いは最後の ③ という言葉に表れている。

① ① Ⅰ あてはまるひらがな二字を入れなさい。

② ② Ⅱ あてはまる漢字一字を入れなさい。

③ ③ Ⅲ 「父のあたたかい気持ち」をはっきり示す部分を詩中から二十五〜三十字で見つけ、はじめと終わりの三字を書きぬきなさい。

④ ④ Ⅳ にはどれがあてはまりますか。

ア いい仕事についてみせるから。
イ いい子になってみせるから。
ウ いい点数をとってみせるから。
エ いいおとうさんになってみせるから。

□ 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

お正月は、昔の日本の香りがする。お彼岸もお盆も、かつてのものとは別物になり、代わりにクリスマスやバレンタインデー、果てはハローウィンといった新年度の年中行事が□□を利かせている。しかし、元旦は漂う空気からして清冽に思え、空には静かに光が満ち、心の日本の風景がいまもこの日だけには現れるようだ。

この「正」という字はみごとに、名は□□でなく、□□が名を表している。斜線も曲線もなく、縦と横の線だけから成るそれは、その持つ意味にふさわしい。①ガマエをして「正」の反対の字はいろいろ考えられるが、たとえば正邪の「邪」だと、左側には斜めの線や②右側には蛇が這っているような線があつて、まるで対照的に思える。漢字の字源は別として、いまある「正」という漢字の形状は、持っている意味そのままに見える。それゆえに、やや窮屈とさえ言えるかもしれない。

③角□面、たとえば幼いころ、学校に感じたものの全てがそこにつままっているかのようだ。正義、正確、正解……。学校に④ブテキオウであつた私には、この「正」が苦手に感じられる。

しかし、この字、学校では別のかたちでも現れた。読者も⑤オボえていらつしやるだろう、学期始めの委員の⑥選挙の時、票を数える際に、一票毎にタテヨコの線を足して「正」を作り、この字一つが五票分としてカウントされたのだ。黒板に書かれた××君と○○君の姓名の下に、「正」の字の列が伸びていく。大人⑦ドウヨウ、子供も選挙には⑧ゴウブンする。私などは、学級委員は無理だったが、図書委員あたりには選ばれたこともあり、先生によつてはそんな脇役も投票で選ばせていたような記憶がある。閑職であれ、自分の名前の下に「正」の字が並ぶことによつて、みんなから選ばれるのはうれしかった。その時の「正」はころころとしたサイコロのようで、親しみが湧いた。この「正」

と、正面からやってきて正道を⑨トクかのような「正」と、どこか肌合（はだあ）いが違う。正月はどちらなのだろう。正義の月？ 正確な月？ それとも。

そんなことを考えていたら、京都のお茶会に招かれた。ある雑誌で茶の湯を特集するのに、客として出たのである。しかし私の立場は、連客といつて、いわば補佐するような役割を受け持ち、その茶席では他の方が主役であつた。その役の呼び名が「正客」。招く側の主人に、招かれる側の代表として応接する。⑩これだな、と思った。正しい正しくないというのとは別の、中心、基、といったもう一つの意味がそこにはある。正月の「正」も、そして選挙の時の「正」の字の使われ方も、何かを始める時の、中心、基礎となるようなものを表しているのだ。

正月は、一年の開始、全ての基である。時間には過去から未来まで棒のごとく続くものもあれば、毎年くり返される輪のようなものもある。正月はその輪の時間に付けられた⑪キザみ目である。この月を大事に過ごし、二月につなげ、三月を迎えることで、充実した一年を過ごすことができる。実際は、昨年など一月も二月もあつという間に過ぎ去つて、気が付くと秋になっていたのだが、それはそれ、またこうして正月がやり返りし与えられる⑫チャンスなのだ。そのことを静かにかみしめて、元旦を迎えたい。

【語注】清冽Ⅱ清らかで冷たいこと。

閑職Ⅱ仕事の少ない、ひまな職務。

(船曳建夫『一字一話』角川書店)

①～⑦のカタカナを漢字に直しなさい。

⑧を利かせるが「勢力をふるう」という意味の慣用句になるように、□□にひらがなを入れなさい。

⑨(二カ所)に漢字一字を入れなさい。

⑩「右側には蛇が這っているような線」の部分は「邪」の部首になっていますが、部首名を答えなさい。

⑪「角□面」の空欄に同じ漢字を入れて、四字熟語を完成させなさい。

⑫「選」の画数を算用数字で書きなさい。

⑬はどのようなことですか。

ア「正月」の「正」と「正客」の「正」は同じような意味を持っている。

イ「正客」は、「主役にふさわしい、正しい客」という意味である。

ウお茶会に招かれた人々は、「主役」と「脇役」に分けられてしまう。

エ選挙の時の「正」は、「正確を求める」ということで使われている。

⑭「一年経つと元のところに戻ってくる」というように感じるののは、時間をどのようにとらえているからですか。本文中から七字で書きぬきなさい。

⑮「チャンス」について、正月は何の「チャンス」ですか、本文中から十字で書きぬきなさい。

三 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

昨年暮、わたしの五十一年の詩業が一冊の文庫にまとめられることになって、郡山市に生まれた大正十四年から現在までの年譜づくりに没頭した。過去を跡づける記録など取っておかない主義だったから、年次など正確を期するのは容易ではなく、ことのほかてこずったが、書いていくうちに思いがけない遠い昔のことが絵のようにあざやかにうかんできた。けっこう楽しい作業でもあった。なかでも昭和十三年安積中学校入学から十八年卒業まで五年間の中学生生活は、あとからあとから思い出がふくらんできて、しばしば筆を措いて甘美な回想にふけったことだった。

①年譜にはしよせん書きこめないそんな中学生生活の思い出のなかから、再び忘却のかたにしまいにむにはおしい思い出をひとつ。

たしか五年生になりたての晩春のころ。四年生に札②のワルがいて、低学年生がいじめに泣かされたり、③それどころかその彼をリーダーとする一味は、気弱なわれわれの級友をさえおびやかしていた。ついに④にあまり、五年生の責任において⑤「説教」しなければということなり、彼を放課後の教室に呼び出した。常にポケットに竹刀のツバをしるばせているというしたたかな彼との押し問答のあけく、カッとなつたS君が彼をなぐった。手を出したのはS君ばかりではない。生意気だ、やつちまえとどなりながら数人が余勢をかって鉄拳をふるったのは、当時の中学生気質としては当然だったろう。ただし昨今の中高生たちのリンチのような、程度もほど知らぬ無法なものではなく、けがひとつ負わせるものでなかったのは無論である。

だが相手が悪かった。その男の父親は市の有力者で、彼はその権勢をカサに着ての日ごろの横暴だった。当然父親は学校に談じこんできた。医師に勝手に書かせたのだらうけがの診断書を添え、S君を名ざして処分しなければ告訴するといふのである。緊急職員会議が続けられた。S君はわが学年を代表する優等生であり、それは職員室も十分に承知だったが、何分にも⑥相手が悪い。学年主任のS先生が苦境に立たされて、という情報も伝わってくる。五年生対四年生の対立意識も騒然と高まった。わたしたちも、放っておけばストライキにも発展しかねない状況に追いこまれた。わたしたち有志は夜遅くまで対策を練った。わたしは徹夜で長文の嘆願書を巻紙に書き、早朝自転車で登校、校門前で同級生に呼びかけては署名を集め、S先生に提出した。S君はわれわれの代表であり、今回の制裁は五年生全員の意志であって連帯責任だ、という、有志一同退学覚悟でS君の処分阻止を願ったものだった。

S先生も退職願をふところに、その嘆願書を職員会議で朗読されたという。結局学校側の⑦良識は、時間かせぎで処分保留のままうやむやに事態を収めてしまったようだ。

結末はともかく、目を充血させて、嘆願書を持って学校へ自転車を走らせたあの朝のああいふ緊張は、半世紀をへだてたいま思い返してもなつかしい。精いっぱいムキになって生きていたあのころこそ、まさに⑧そのものだったといえよう。

(菊地貞三『行雲流水』花神社)

- (1) ①「年譜にはしよせん書きこめないそんな中学生生活の思い出」を大切にする筆者の、基本的な生き方を述べた部分を二十字で見つけ、はじめと終わりの三字を書きぬきなさい。
- (2) ②に適当なひらがな二字を入れなさい。
- (3) ③「それどころか」とある理由について説明した次の文を完成させなさい。必要な語は()内の指示にしたがい本文中より書きぬくこと。

(四字以内) にもかかわらず (四字以内) を (六字) いたから。

- (4) ④に体の部分を表す漢字一字を入れなさい。
- (5) ⑤「説教」に「印がついているのはどうしてですか。ア学年の違いをこえた行為だから イ強い責任を感じての行為だから ウ説教といえるような行為ではないから エ効果を期待できるような行為ではないから」
- (6) ⑥「相手が悪い」とあるのはなぜですか。「くだから」につながるように十二字で書きぬきなさい。
- (7) ⑦「良識」という語にこめられた気持ちは次のどれですか。
- ア 問題の解決より在校生一人一人を大切に学校への敬意
イ 何としても争いを避けようと努力する学校への同情
ウ 両方の生徒を仲良しに育てようとする学校への親近感
エ 両者の言い分を立て、白黒を明確にしない学校への皮肉
- (8) ⑧にあてはまる二字の熟語はどれですか。
- ア 希望 イ 青春 ウ 自由 エ 苦悩

四 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

大倉記代が広島赤十字病院に入院したのは、昭和二十九年十二月、広島市立国泰寺中学二年の冬だった。肺浸潤という結核性の病気で、長期の療養が必要だった。当時十四歳だった彼女は、小児科病棟では最年長者である。

記代にとって、発病につづく闘病生活は、苦痛の連続だった。

生まれてまもなく父をうしない、母ひとり子ひとりで育ってきた。生活はけっして楽ではなかったけれど、母娘ふたりの、ある意味で気ままな毎日だった。その暮らしが、発病とともにいきよにくずれてしまった。医師の話では、すくなくとも半年の入院と、おなじくらしいの自宅療養をかくごしなくてはならないという。むろん学校は一年間休学となる。④十四歳の少女にとって、一年の留年は、一生の運命をくるわされてしまったような気分にはせられた。

最初のころこそ、病気なのだから、病気さえなおればと、自分をはげましていたが、それも単調な入院生活がつづくうち、いつしかあせりと絶望のくりかえしにかわっていった。

入院したころは、足しげく見舞ってくれた友人たちも、新学期になってからは、めっきり足が遠のいてしまった。二年生の間ならクラスメイトだが、進級した級友たちにとって、記代は、もうクラスの友だちではなくなってしまったのかもしれない。

病院のなかに、おなじ年ごろの友人でもできればなぐさめにもなるだろうが、あいにく小児科病棟の子どもたちは、小学校にもあがっていないいちびつ子ばかりだった。

いや、ひとりだけ記代にちかい年齢の少女がいた。二月の終わりに入院してきた佐々木禎子である。この少女のことは、看護婦さんや、同室のおとなの患者さんたちのひそやかな会話のなかから、もれ聞いていた。⑤原爆のため白血病という重い病気にかかり、けっして快方にむかつてはいないということも知っていた。

まったく病院というところはふしぎなところで、⑥他人の病状については、いつの間にか本人以上に精通してしまうものなのである。

原爆症におかされた少女。記代も最初、そのうわさをきいたときは、

すくなくからずショックをうけたし、遠くから禎子のすがたを、同情をもつてながめていた。しかし、そうした悲しいうわさとはうらはらに、禎子はあきれるほどほがらかで快活だった。入院して一週間もしないうちに、病棟の子どもたちと仲よくなり、また同室のおばさんたちにもかわいがられるようになった。

あれが重い病気にかかった少女なのだろうか。記代は、ろうかを走りまわり、屋上かけのぼっていく禎子のうしろすがたを、なかばはぐらかされたような気もちでながめていた。

記代自身はいえ、入院以来、ただただ自分の病気をのり、貝のように自分のからにとじこもっていた。母娘ふたりだけの生活になれてしまったせいも、他人との交流がおつくうな性格でもあった。

同室のおばさんとも、あまり深いつきあひもなかった。小さな子どもたちは、はつきり言って、うるさいばかりだった。せいぜい、ごくかざられたお気にいりの子どもと遊んでやるくらいだ。こうした記代の態度は、しぜん周囲の患者や看護婦にもつたわり、⑦記代のことを敬遠するようになっていた。すくなくとも、記代には、そうみえたのである。

禎子は、あらゆる面で、記代と対照的だった。サダちゃん、サダちゃん、おとなも子どももしたしみをこめてよんでいる。彼女の歩くところ、つねに二、三人のちびつ子がくっついていて。

彼女が、よその病室に遊びに行き、おとなの患者さんに髪をあんでもらっている光景を見たときには、この二歳下の女の子に、軽いしつとのようなものを感じた。

(中略)

天気の良い日、むかひの外科病棟の患者さんが、いたずら半分に分鏡で禎子や記代の顔に、チカチカ日光を反射させる。すると、禎子は間髪をいれずとびおきると、自分も手鏡をもって部屋をとびだすのだ。ふたりの部屋は北むきだから直射日光があたらぬ。禎子は、日光のあたっているよその部屋にいられてもらって、そこから外科病棟にチカチカのおかえしをするのだ。

小学校時代、サルというニックネームがついていた禎子だけに、こうしたすばやい行動はお手のものだった。

記代には、そんな禎子の活発さが、うらやましくもあった。自分だって、禎子といっしょにはしゃぎまわりたい。心のどこかに、そうした気持ちがあつたけれど、記代は、そんな気もちをおしつぶして、短く宣言する。

「サダちゃん、すまんけど、ちよつとしずかにしてくれる。いま、本読まよるんよ。」

「あ、ごめん。」

禎子は、まったくめんぼくなさそうに、こそこそとベッドにもぐりこむのだった。

そういえば、禎子はちかごろ友人がくると、すぐに部屋をでて屋上に行くようすだ。禎子の友人たちは、かならず三、四人がつれだつてくる。

中学一年生の見舞い客は、そこにむらがつて立っているだけでにぎやかだ。禎子は、記代に気がねして、友人たちを屋上につれていくらしかった。友だちも、それほど長くはいなかった。せいぜい三十分ほどでもどつてくる。屋上からエレベーターでおりてくる禎子は、そのときだけ、みようにさみしそうにしていた。友だちは、みな中学生として新しい生活をはじめている。そのなかで、自分ひとり、この白い病室にとじこめられてるのだ。禎子の気もちも、記代にもわかるような気がする。

それでも記代は、禎子ときおりうらやましく思えてならなかった。月に一、二度、禎子は家に帰っていたし、家族の人も、ひまをみつければ、病院にやってきた。

とくに母親のふじ子は、足しげくやってきては、病室に泊つていくのである。小ぶとりの母と、小がらな禎子が、だきあうようにして寝ているようすは、いかにも仲のよい親子にみえる。

だが、記代には、そんな母娘の寝すがたまでが、なにやら⑧うとましく感じられてならなかった。

「ふん、なによ。中学生にもなつて。みつともないつたら、ありやあしない。」

そんな舌うちのひとつもしたくなる。

記代の母は戦前からの職業婦人だったせいも、あつけないほどさばさ

ばしていて、とても記代と、そい寝なぞしてくれそうもなかった。記代だって、そんなべたべたした母娘の関係はねがいさげだった。いや、もしかししたら記代も、母親に思いきりあまえたかったのかもしれないが……。

六月にはいると、禎子の病状がふたたび悪化してきた。一時、縮小していた首のリンパ節が肥大してきた。脾臓のはれも、医師の触診によると、指二本のはばのしこりができている。

ただ白血球数だけは、輸血の続行によつて、なんと一から二万までの間を維持していたが、それとても正常人の二倍をこえる数値だった。そのころ、おなじ小児科病棟に入院していた五歳の女の子が死亡した。

禎子とおなじ急性白血病患者である。まだミルクのにおいがのこつていそうな、色白の少女を、禎子はもちろん、記代もよく知っていた。

少女の死んだ夜、ふたりはどちらともなく、少女におわかれをするこゝとした。女の子のなきがらは、病院の霊安室に安置されていた。ふだんは、気味が悪くて、昼間でも近よれそうもない死者の部屋に、ふたりはなんの恐怖感もなくはいることができた。

簡単な祭壇の前におかれた小さな棺のなかに、少女は眠るようによこたわつていた。ふたりは、お線香をあげ、長い間、掌をあわせた。

外は、つゆの雨が、だらだらとふりつづいていた。おまわりをおえて、病棟に通じるうす暗いわたりうかを歩いてきたときだった。

ふと、うしろを歩いてきた禎子が立ちどまった。

「うちも、あして死ぬんかしらん……」

禎子のつぶやくような低い声に、記代はおどろいてふりかえつた。禎子は、わたりうかの中ほどに立つて、暗い雨の庭を見つめていた。

「ばかなこと、いいんさんな！」

記代は、思わず知らず、両手で禎子の肩をつかんだ。禎子の体にふれたのは、これがはじめてだった。うすいゆかたの布地をとおして、禎子の異常に骨ばつた体の感触が、記代の指さきにつたわってきた。

(この子は、こんなにやせていたのか。)

それは、ふだん快活にふるまっている禎子のものとは信じられなくらいに、細くてよわよわしかった。

「姉ちゃん。」

禊子が、たまりかねたように記代の胸に顔をうずめて泣きはじめた。この子は、自分の病氣のことを知ってるんだ。知っていて、必死で耐えている。そう考えると、いままでの禊子の行動が、がらりとちがって見えてきた。彼女が活発に行動するのも、母親にあまえるのも、^⑧せまり来る死の恐怖とたたかっているすがたではなかったのか。

「サダちゃん……」

記代は、泣きながら、心の底からしたしみをこめて、彼女をだきしめた。大がらな記代のうでのなかで、禊子は、いつまでもいつまでも泣きつづけた。

おもえば、佐々木禊子が、生命の燃えつきる最期の時期に、大倉記代にめぐりあったことは、ただひとつのなぐさめだったといえる。家のなかでは、つねにもものわりのよいお姉さんとして、妹や弟をかわいがり、入院後も小さな患者のめんどろをみていた禊子にとって、生涯にただひとり、胸に顔をうずめて泣くことのできる、お姉さんにめぐりあえたのだ。

この夜以来、記代と禊子は急速にうちとけていった。
(那須正幹『折り鶴の子供たち』PHP研究所)

(1) ——— ①「十四歳の少女にとって、^①気分

ア 学校は自分にとって日常生活の中心であり、級友から自分だけ取り残される感じがしたから。

イ 元は元気だった十四歳の少女にとって、一年もの間運動できないのはたいへん苦痛だから。

ウ 休学する一年間の勉強の遅れは相当なもので、おそらく将来の進路にかかわってしまうから。

エ 母娘ふたりでつましく暮らしてきたのに、入院にかかる費用は生活を苦しめてしまうから。

(2) ——— ②「原爆」が広島に投下された年月日を次から選びなさい。

ア 一九五〇年 八月九日 イ 一九四五年 八月六日

ウ 一九四〇年 八月九日 エ 一九三五年 八月六日

(3) ——— ③「他人の病状については、いつの間にか本人以上に精通してしまう」のはなぜですか。次から選びなさい。

ア 病院は病状に関する情報があふれているため、誰に聞いても教えてくれるから。

イ 本人の前では病状についてふせている一方、いないところで話題になるから。

ウ 患者達は身近な親族より、他人の方が気がねなく病状を打ち明けられるから。

(4) ——— ④「記代のことを敬遠するようになっていた」のはなぜですか。解答欄にあらうように本文中から二十字以内で見つけ、はじめと終わりを三字ずつ書きぬきなさい。

記代が (二十字以内) から。

(5) 文中に出てくる二つの「うらやましく」について、次の問いに答えなさい。

① 記代は禊子のどのようなところをうらやましく感じたのですか。周囲との関わりをふまえて二十五～三十字で説明しなさい。

② 禊子をうらやむ心情を短く言い表した語を本文中から三字で書きぬきなさい。

(6) ——— ⑥「うとましく感じられてならなかった」のはなぜですか。「くから」につながるように十四字で見つけ、はじめと終わりを三字ずつ書きぬきなさい。

(7) ——— ⑦「せまり来る死の恐怖とたたかっているすがた」とありますが、そのように感じられたのはなぜですか。

ア 死がせまっていることを周囲に隠し、母親の前でも気丈にふるまっていたから。

イ 死をも恐れずに病氣と正面から向き合って、周囲の人たちに元気を与えたから。

ウ 間近にせまる死を受け入れずに、希望を持って日々を明るく過ごしてきたから。

エ 死を予感しながらも快活さを失わず、母に甘えることで自分を支えていたから。